

調査報告

韓国の古式藍建て法

城 崎 英 明

はじめに

藍染めの歴史はきわめて古く、古代ローマとインドとの交易品の記録に「藍」があったり、日本では縄文時代繊維遺物の中に「藍」の色素が検出されたりする。

藍染めの技術はアジアを中心に世界各地に広く分布しており、その主原料である藍の色素を持つ植物の種類や、藍を建てるための助剤として使用される天然の材料には、実に多様なものが存在する。例えばタイの一部地域では、藍を還元するのに蟻塚の煮汁を使ったりする、しかし、科学的な見地から観れば、藍を建てるための基本的な考え方は、いずれの地域においても同様であり、それは藍醗酵菌の増殖に適した環境をつくり、良好な還元状態をつくりだすことにある。つまり、他の腐敗菌の増殖を防ぎ、色素の溶解度を高めるために、強いアルカリ浴をつくること、そして藍醗酵菌が増殖するための温度と栄養分を与えることである。

次に各地に存在する多様な藍建て方法を広く観察すると、その大半が日本の琉球藍にみられる石灰による泥藍と同様の、沈澱藍によるストックバット方式であることがわかる。泥藍をつくりストックする方法は、古くはインドに始まり世界各地に伝播したものであると思われる。インドではイギリス統治時代から大きなプールを使って大量の藍色素を沈澱させ、乾燥させてケーキ状の固形物として生産し、海外にも輸出してきた歴史がある。一年のうちでも植物の藍色素含有量の多い時期を選び、収穫した植物から抽出した色素を、顔料化し凝縮して保管しておき、必要な時に必要なだけ建てるという、非常に合理的な方法である。

韓国においても一般に知られているのは、この泥藍の方法である。しかし今回調査取材した方法は、それらとは異なるもので、藍染技術の進化段階から観ると、最も原始的な摺り染めや生葉染めから、泥藍やすくもといったストック方式に至るまでの中間的な技術のようにも思われる。一方日本では、「すくも」の製造という特異な技術が生まれ、独自の発展を遂げて来た。すくもは茎葉を発酵させ、たい肥状にしてまると濃縮し保管する方法であるが、それ以前の方法や、どのようにしてすくもの技術が生まれたかといった発展段階については不明である。

名住職の寺

今回取材したのは、韓国の南、釜山市街から少し北の山間地にある、名刹「通度寺」のさらに奥山にある、別院「瑞雲庵」である。この寺の住職である性坡氏がこの古式藍染法を復活させた人である。寺は広大な山野を有しており、「庵」のイメージとはまったく異なりそれだけでひとつの大きな寺である。周囲の山を含めて見渡すかぎりの畑や果樹園、山林を有している。

性坡氏は本山に代々所蔵されてきた、膨大な量の経本の版木をもとに、一から陶芸の勉強をし、巨大な登り窯を築き、16万枚もの陶板のお経を本年夏に完成させた。さらに同時に取り組んできたのが紺紙金泥経の製作である。染色にも素人であった氏は、藍染めを思い立った翌日には、日本の徳島に出向いているという、たいへんな行動力の持ち主でついにこの古式の藍染法を復活させたのである。さらには藍の浸染に耐える強靱な韓紙の紙漉きにも挑戦し、みごと成功しているのである。

氏はこの藍染技術を自分だけのものとはせず、弟子の僧侶にも伝授し、本年は大学の研究者や愛好家を招き、セミナーを催し公開したのである。セミナーは3日間の予定で、醗酵段階の異なるいくつかの瓶を用意し、仕込みから染色まですべての工程を体験できるように準備されていた。また、生葉による摺染や紅花染も同時に行なわれた。

性坡氏（瑞雲庵前庭にて）



復活した山間地方式の藍建て

泥藍の方法において、自然醗酵し水中に溶け出した色素を沈澱させ、泥藍に加工するには、大量の石灰を必要とする。古い時代の石灰は、日本と同様に牡蠣殻などを焼成してつくる貝灰であった。つまり海岸から遠く隔離された山間地では、この貝灰を入手することが困難で、独特の方法で行なわれていたと性坡氏は語る。さらにこの方法は、韓国内でも慶尚道地方独特のものであるとのことで、かなり特殊な方法のようにも思えるが、別の見方をすれば、泥藍製造技術が韓国に伝わる以前の、古式であったのかもしれない。泥藍による藍染法は、かつて韓国の海岸沿いに多く存在した。しかし、時代の流れはその存続をも許さなかった。

歴史的には、朝鮮統一から李朝時代の前期には、様々な工芸技術が国家的規模で統合・整理され、官営の細工所のようなものがつくられていたことが、「経国大典」などの書物に記録されており、ある意味で工芸技術は頂点に達していたと思われる。しかし儒教思想による国家統制の強化が進むにつれ、形式的・教条主義的な管理体制となり、仏教も抑圧され仏教的な工芸品や民間の工芸は衰退してゆく。ただ藍染めに関しては、李朝時代中期の綿織物の隆盛とともに、両班の収入源として王族から庶民にまで全国的な流行をみせた。しかし、その後の日本を中心とする近隣国の侵略や植民地支配により、それも崩壊し、さらには南北の朝鮮戦争により、それまでに培われた豊かな工芸技術や、貴重な記録も失われてしまった。通度寺の本堂の礎石には、秀吉の軍勢に焼かれた傷跡を今も見ることができる。1940年代の初頭までは内陸のごく一部の地域にだけ、わずかにこの藍染の方法が残っていたとのことであるが、現在まで正確にその技術を伝えられる人は存在しなかった。

独特の藍建て工程

まず花穂が出る前の蓼藍を畑から刈取る。茎葉を水洗いして、大きな瓶（一石瓶）に詰め込み、水を満たし重石をする。そのまま暑い日向に放置しておく数時間で色素が溶け出して来る。暑い時期だと翌日、秋には2~3日後くらいに少しずつ醗酵し始め小さな泡がたってくる。液の色はきれいな青緑色になってくる。ここで一旦茎葉を取り出して、上下を入れ替える。さらに2~3日、秋には4~5日くらい放置すると、さらに醗酵が進み、大量のガスが発生し茎葉が押し上げられ、水面にはたくさんの泡のかたまりができてくる。葉の色は葉緑素が分解され、セピア色になり、液の色は濃厚な黒っぽい藍色に変わる。葉の藍色素は水中にほとんど溶け出し、茎葉は腐敗寸前の状態である。この状態で瓶から茎葉をすべて取り出し、液は目の細かなふるいで濾されて瓶に戻される、この時の液量は瓶の約半分くらいである。

次に灰汁を加えるのであるが、灰汁の元になる灰は櫓や檜などの堅木を燃やし、その上に蕎麦殻、豆殻、胡麻殻、糯米の粃殻などをのせて燃やしてつくる。その灰を布を敷いた笊に入れ、熱湯を注いで灰汁を抽出する。灰汁の材料としては蕎麦殻が一番良いとのことである。他に草木灰、藁灰なども使えるがあまり良い灰汁はとれないそうである。この琥珀色の濃厚な灰汁を瓶に注ぎ入れ、全体の液量を、瓶の3/5~4/5くらいにしてよく攪拌する。一度攪拌してから、穀酒（コクチュウ）という雑穀からつくられた酒（どぶろく）を1リットル秋には1升位加えるという。この時の瓶の液のPHは9~9.5くらいである。このPHの値は藍の醗酵にちょうど良いと思われる。日に4~5回竹棹で激しく攪拌しながら醗酵が進むのを待つ、1回に30~40分もひたすら攪拌しながら待つと、夏の暑い時期の晴天つづきだと4~5日、秋には5~7日で最初白っぽかった泡が少しずつ青味を呈してくる。

泡の色がかなり濃い青色になったところで、さらに灰汁を加えて瓶を満たす、この時のPHは10.5~11くらいである。日本で言う止石である。さらに攪拌と放置を繰り返すと、約半日~1日で染液の表面にメタリックな膜がはり、濃厚な藍色の泡ができ、液は粘り気をおびて棗くらいの大きな泡がたつようになる。これでいわゆる藍の華が咲いた状態となり藍建ての完了である。

セミナー会場となった宿坊



広大な畑に育つ蓼藍

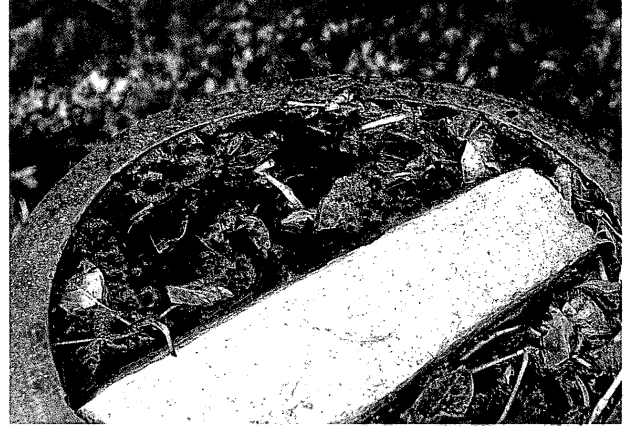


蓼藍の背丈は60~70cm、株の根元から数本に分枝している。葉の長さは10cm程度である。

蓼藍の花（白い花も混生していた）



自然醗酵する茎葉



茎葉の水洗いをする大眼氏



ガスが発生し持ち上げられた重石



甕に入れた茎葉

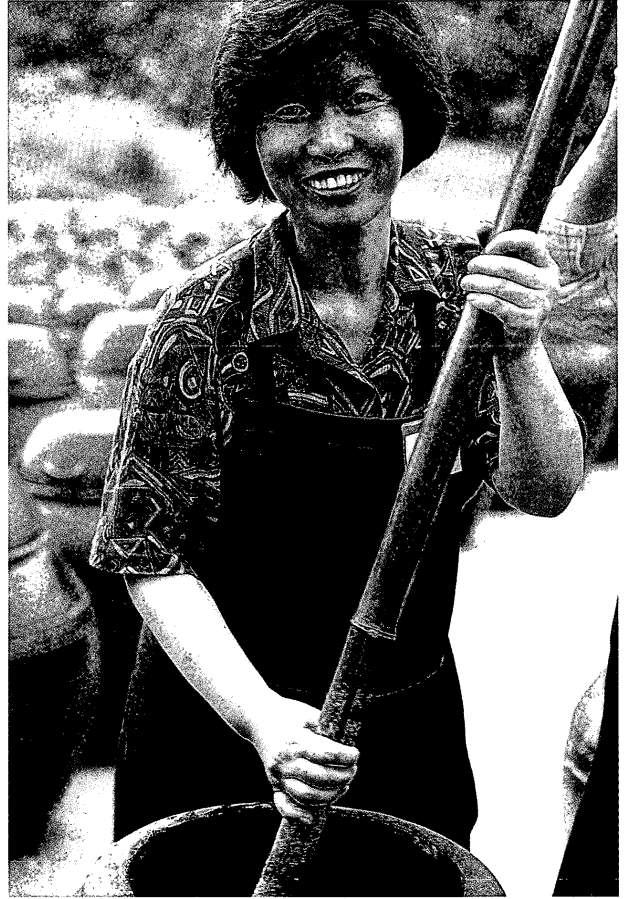


夏期の自然醗酵は力強く、多くのガスが発生し茎葉の間にたまり重石を持ち上げ、腐敗臭がしてくる。こうなると茎葉の取り出しは近い。

茎葉を取り出す



攪拌する 李徳順 先生



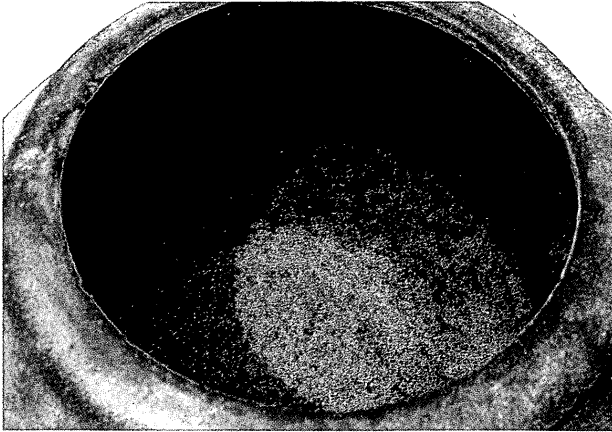
灰汁づくり



太い竹で攪拌する作業はかなりの重労働である。セミナーでは参加者が交代で行なったが、いくつもの瓶に同時に建てるとなると、一人ではたいへんな作業である。

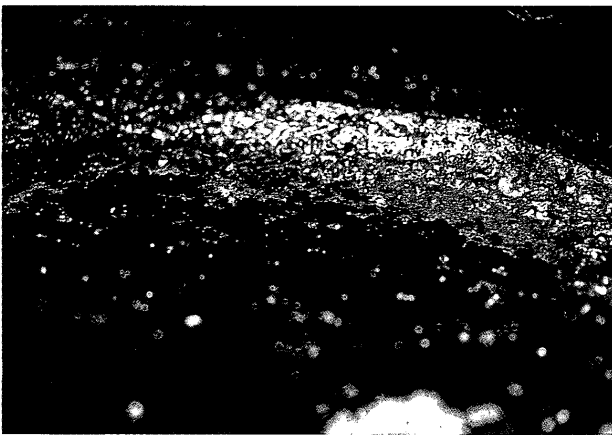
藍の醗酵菌は液中の酸素を大量に消費する、酸素が少なくなると醗酵は進まなくなるので、定期的に攪拌して酸素を補給してやる必要がある。

少し建ち始めた藍



濾した液に灰汁を加え何度か攪拌した状態、瓶の3/5~4/5位の液量で、少し青味がみえるが、泡は小さい。

完全に建った藍の表面



濃厚な群青色の泡が良好な還元状況を示しているメタリックな酸化膜に空の色が映り、いわゆる「瓶覗き」の色が見える。

染色

染の工程については、特に日本と異なったことは無かったが、この藍建方法では、あまり高濃度の染液は得にくく、一度の染めでは薄い色しか得られない。しかし、中干しを何度もおこない、何十回と染め重ねることで、繊維の内部まで色素が浸透し、非常に高い堅牢度が得られるとのことである。その理由としては、植物にもともと含まれる、藍膠などと呼ばれる様々な不純物が堅牢度の向上に影響していると思われる。

近年、日本では時間と手間を省くために、インディゴピュアを割建てしたりして、色は濃いが堅牢度の低いものが多いように思える。

今回の取材から

一般によく知られている泥藍の技法は、アジアではインドから東南アジア、中国そして韓国や沖縄にいたる広い地域に存在するが、それ以外にその地域独特の藍建法、染色法が存在することも事実で、それらは材料、方法など実に多様なものがある。

アジアの少数民族の独特の藍染法は、民族の移動とともに国境を越えて複雑に分布し、例えば中国の雲南省では、ごく限られた狭い地域内でも、複数の染色法が存在し、異なった種類の藍染め用植物が使われている。言語ににおいても然りで、調査は複雑かつ困難を極めるものがある。そんな多様な染色技術も近代化の中で急速に失われつつあり、一度失われた技術は簡単に復活できないことも事実である。

アジアのどの地域に取材に訪れても、一様に感じさせられるのは、人間の営みが自然環境を大きく変えてしまっていることである。動植物の生態系も大きく変化しており、そうした動植物が死滅したり、減少することで、入手できなくなった材料や道具も多く、その結果失われた技術も、多くあったと想像する。

さらに、近代化による人々の生活スタイルの変化は、時間に対する感覚も変化させているように思える。濃厚で堅牢な染色を得るために、かつての人々は膨大な時間と手間を費やしてきたが、それを時間の無駄と感じる人はいなかった。近代化された社会では何ごとも速く、簡単にできることが良しとされる。

化石資源による化学製品に依存し築かれてきた現代文明は、いつか終わりを迎えるはずであり、失われてゆく技術がまた必要になる時が来ると確信し、現存する染色技術を記録にとどめる事は、これからの人類の未来の為に重要な事だと考え、調査研究を続ける今日この頃である。

追記

通度寺で栽培されていた藍は、品種の確認はできなかったが、おそらく「小上粉」であろうと思われる。花は赤と白が混生していた。収穫は通常2番苜りまでするが、ビニールハウスを使って、3番まで苜ったこともあるそうだ。肥料は堆肥をつくっているとのことだが、具体的にその材料は聞かなかった。その他、上人のお話の中で興味深かったことを、付記しておきたいと思う。

- ・暑い日には、藍の染めの色味が赤っぽくなるので涼しい時間に染めるのが良い。
- ・藍瓶に入っている布の染まり具合を目で確認するには、氷の固まりを浮かべ、その氷を通して覗き見る。
- ・高濃度の染液が必要な時は、藍の葉だけを使う。
- ・紺紙に使う手漉きの韓紙は、瓶に一晚浸けて置いても溶けてしまわない。

最後に

韓国と日本の間には拭いきれない過去がある。日本の植民地支配や、資本主義的搾取により、それまで培ってきた民族文化は崩れ去り、韓国民は精神的に大きな傷を負わされた。それと同時に古くは秀吉が、捕虜あるいは奴隷同様に連れ帰った、韓国の多くの職工たちが、今日の日本の工芸技術の基礎をつくってくれた事や、バブル期の日本の繁栄の陰には韓国の安い労働力があつたことを忘れてはならないと思う。そういった過去には一切触れないで、我々日本人を歓迎してくださる韓国の方々には本当に頭が下がる思いがする。

今回の取材は、そうした韓国の多くの方々の御理解、御協力を得て実現しました。特に取材期間中の寝食からすべての面でお世話をいただいた、通度寺の御住職はじめ韓国伝統染色研究会の皆様方には、心より御礼申し上げます。

御世話になった方々（敬称略）

取材助手・通訳

盧 慶 美

取材協力

性 坡 通度寺 瑞雲庵住職

大 眼 金華寺住職 釜山

李 徳 順 韓国伝統衣装作家 釜山在住

張 貞 戴 釜山大学教授

韓国伝統染色研究会の先生方

(きざき・ひであき 工芸科/繊維・染色)

(平成12年10月27日受理)